

# きこえるってどういうこと？ ～あなたの気づかなかった世界を知ろう～ 実施報告

学習支援・教育開発センター 助教 矢内真理子

## 1. 概要

本稿では、学習支援・教育開発センターが主催した講演会「きこえるってどういうこと？～あなたの気づかなかった世界を知ろう～」の実施報告を行う。本講演会では、講師に望月香代氏（身延山大学専任講師、手話通訳士）、司会に玉井湧太氏（同志社大学研究開発推進機構特別任用助教）を迎え、2021年7月2日の6講時（18時25分～19時55分）に実施した。参加対象者を本学学生、本学教職員とし、実施方法はZoom上で、オンラインで実施した。センターの教職員・ラーニング・アシスタント（以下、LA）も含め、58人が参加した。

## 2. 実施の背景と企画の主旨

もともと、同志社大学は全国の大学に先駆けて点字受験の対応を1949年から実施するなど、ハンディキャップを持った学生への支援に力を入れてきた（スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室 2022）。同志社大学では、2021年4月にスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（以下、SDA室）が開室され、より包括的に学生に対する支援を行う取り組みが進められており、本講演会は、こうした時流の中で実施された。

**きこえるってどういうこと？**  
～あなたの気づかなかった世界を知ろう～

**2021年7月2日(金)6講時**  
(18時25分～19時55分)

**講師：望月香代氏**  
(身延山大学専任講師、手話通訳士)  
**司会：玉井湧太氏**  
(同志社大学研究開発推進機構特別任用助教)

講師経歴：望月香代（むつぎ かよ）  
五川学園女子短期大学教諭を経て、同志社大学社会福祉学専攻、1994年山梨県福祉手話通訳者、1997年厚生労働省認定手話通訳士、1998年より身延山大学非常勤講師。現在、専任講師として勤務中。聴覚障がい学生の支援も行った。また山梨県障害者福祉協会に勤務もした。聴かせ、聴き取りの経験が豊富に蓄積されている。

「きこえる」私たちの行動様式や物事の受け取り方などは、多くの面で「きこえる」ことを前提に成り立っています。ところが、きこえない人・きこえにくい人はそうではありません。ではどのような受け取り方をしているのでしょうか。今回の講演会では、手話通訳士として長年活躍されている望月香代先生から、様々な事例を通して「きこえる」世界と「きこえない」世界をつなげるために、私たちができることをお話させていただきます。会場には聴覚障がいの方がいらっしゃるかもしれませんが、本場を知っているか、もう一度振り返るきっかけになれば、と考えています。

**予約不要**  
**対象：本学学生、本学教職員**  
**実施方法：Zoom**

参加方法は7月1日(木)までに下記宛先までお問合せください。

主催・問い合わせ：同志社大学学習支援・教育開発センター  
j-kyoik@mail.doshisha.ac.jp  
※このイベントは、センター内での活動のために開催します。あらかじめご了承ください。

図1：学内への告知チラシ



本講演会は、当初LAの研修のために企画したものだったが、内容的にも全学的に広く共有すべきと判断し、学内の学生・教職員に参加者を広く募った。さらに、本講演会は、望月氏が山梨県在住のため、山梨からオンラインで参加してもらう予定だったが、望月氏の厚意により、良心館ラーニング・コモンズ内で司会の玉井氏と対面で実施し、それをオンラインで参加者に配信する形となった。そのため、よりスムーズなやり取りが実現した。

きく、という言葉には聞く、聴く、訊く、と複数の漢字があてられることがあり、本講演会は、そのすべてを含むタイトルとしてひらがなの「きこえる」とした。また、「きこえるってどういうこと？」は、きこえない人にフィーチャーするのではなく、きこえる人・きこえない人、双方の世界を理解し、つながることを目指してつけた。

本講演会は、第一に、聴覚障がいを含め、障がいがある場合の世界の見え方について参加者が理解すること、第二に、学習相談に障がい者が訪れた場合、支援者であるLAはどのような対応をする必要があるかを、参加者が考える手立てときっかけを作ってもらうことを目的に企画した。そのため講師を、身延山大学で福祉学を教え、手話通訳士である望月氏に依頼した。また、司会者は、工学の分野から聴覚について研究を行っている玉井氏に依頼した。

### 3. きこえる人ときこえない人が関係を築くために

望月氏の講演は、主に「聴覚障害とは?」「きこえることとは」「きこえないこととは」の3点に分けられる。

「聴覚障害とは?」においては、聴覚障害の様々な種類が紹介された。補聴器を使えば会話がきき取れるケースもあれば（伝音難聴）、補聴器を使ったとしても、母音のみが大きくきこえるケースもある（感音難聴）。さらに、きこえ方の違いとして、人との距離が近ければ会話が可能な場合もあれば（軽度～重度難聴）、会話がまったくわからず、「音」は伝わっているが「言葉」が伝わらないケース（ろう）もある。このように、きこえ方の種類や違い、程度にはバリエーションがある。

「きこえることとは」では、きこえる人が気づかなかったことが提示された。発音した際に口の形が似ている言葉（例えば、カベ、カメ、アメ）がきこえない人にとっては判別が難しいが、きこえる人にとっては音できき分けている。こうした事例から、きこえる人は無意識に耳に頼って日常生活を送っていることがわかる。

さらに、きこえる人の場合は、自分の名前を他者から呼ばれることによって、自分

の名前を知ることができるが、きこえない人は他者からの呼びかけをキャッチすることができないので、学校に入学した際に自分の持ち物や机に名前が書いてあるのを見て、初めて自分の名前を知る、というケースもあったという。きこえる人は音から周囲の状況を知り、情報の取捨選択をし、多くの気づきを得て行動していることが、具体的なエピソードとともに紹介された。

「きこえないこととは」では、きこえる人がきこえない人に対してできることが紹介された。きこえる人には、きこえない人がどう不便なのか、どうわからないのかを理解したり想像したりすることが難しい。そのため、きこえる人がきこえない人に対して、気づいた範囲でできることを行っていく必要が示唆された。より具体的な方法としてとにかく曖昧さをなくすこと、箇条書きで端的に説明したり（きこえない人にとってはきこえる人が使う丁寧な言葉遣いや社交辞令がかえって理解を妨げることがある）、日時や曜日をはっきり指定したり（例えば、近いうちに、ではなく、6月1日にしましょう、とか、20時を「夜8時」と表現するなど）、筆談などの際に漢字で書き、目で伝えられる情報を重視することなどによって、きこえる人との情報量の違いを埋め、きこえない人がたくさんの情報から選択できる環境を作ることが挙げられた。

望月氏は、この講演を通して、きこえる人ときこえない人が人間関係を作っていくためのヒントを示してくれた。

## 4. 寄せられた質問

質疑応答の時間には、多くの質問が寄せられた。以下、箇条書きで紹介する。

- ・ろう者同士だと、駅のプラットフォームで離れたところでも手話で会話できるので、すごいなあと思う。同じように、きこえないことでメリットがあるケースを教えてください。
- ・きこえない方への支援として手話だけでなく、PC通訳という手段もあることを大学に入ってから知ったが、例えば、手話通訳者とPC通訳者で、協力して通訳することはあるのか。
- ・学習相談の対応をするときに、LAが2名から3名で対応する形をとっているが、例えば筆談できこえない方に対応する時に、LA同士の会話を、どういうふうに行えばいいのか。
- ・学習相談でそもそも、マスクをしていたり、対応できる時間に限りがあるなど、いろんな制限のある中で、質問者の意図とこちらが伝えることに、齟齬が生じないよ

- うに、うまく時間内でやっていけるような工夫があったら教えていただきたい。
- ・普段ニュースなどで手話通訳の方を見ていると、さまざまなサインを見るが、実際にどれくらいの種類があるのか。
  - ・ブラインドな人々は、街中で困った際に、白杖を上げることなどが知られているが、聴力障がいを持つ方々が困ったことを周りに知らせる際の方法などは決まっているか。
  - ・SDA室（旧障がい学生支援室）で、PC通訳のサポートをしている。あまり気づいていない、気づく機会さえ得ようとしていないことが多くて、驚いた。授業のサポートなど、その場の、一発本番で文字起こしをすることも多いが、2名で連携して対応しても、誤字や変換ミスなど、直さないままに流してしまうこともある。この場合、文字情報に頼っておられる方は、ご自分で、どの程度補完修正が図られるのか。



写真1 当日の質問者からの質問に応じる望月氏（左）と玉井氏（右）

## 5. まとめ

筆者は、日々の学習支援において、必要なケースがあれば、話した内容をその場で文字にしてくれるUDトークというアプリを使ったり、ホワイトボードを使って筆談をすることもある。手話の勉強なども続けてはいるものの、しかし学習支援の場は急に対応が必要になることも往々にしてあり、慣れないと慌ててしまうこともある。筆者だけでなく、LAにとっても、具体的な支援方法を考え、準備することだったり、心の準備をする、という意味で、今回の講演会の意義は大きかったと考える。そして、きこえない人が教室内で座る位置を工夫することで、より多くの情報が得られることや、相手に聴いてもらうための話し方の事例は、実際の授業で実践できればと思う。

最後に、我々に貴重な場をもたらしてくれた、望月氏、玉井氏の両氏に感謝申し上げます。

## 文献

同志社大学スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（2022）

「障がい支援室の沿革（～2021年3月）」

<https://challenged.doshisha.ac.jp/overview/history.html>

（最終アクセス日：2022年5月5日）